

## 第5節 塩の流通

沢田遺跡が塩の生産地であったとすれば、塩の消費地が存在するはずである。塩は海の産物であり、戦国時代「敵に塩を贈る」という逸話があるように、内陸に住む人々にとっても塩は必要不可欠なものであった。本節では沢田遺跡の塩がどのようなルートで運ばれたのか述べてみることにする。

沢田遺跡周辺からの塩の流通経路は陸路と水路の二通りが考えられるが、残念ながら文献はほとんど残っていない。唯一『新編常陸国誌』の中に、「村田渚濟云、本国ニ鹽海道ト云アリ、世俗ノ説ニ、コノ海道ハ本国ヨリ京師ニ至ルマデ直道ナリト云、難所多ケレドモ、尤モ近シ、一日ニシテ江戸ニ至ルベシト云リ、コノ海道ノハテハ鹽崎村ナリ、鹽ノ崎ヨリハ小路ニ入り、佐竹ノ物見塚ヘ出(物見塚ハ町附村ニアリ)、又小路ニ入り、笠原不動ノ下ヲ行クヨシ、大道小路ヲ押切テユクコト故、渡ヲ渉ルコト多シ、鹽ノ崎ヨリ途ヲハジムル故、鹽海道ト云ニヤアリト」とあり、この道は、鹿島方面から海岸線を北上し、大貫<sup>おおぬき</sup>(大洗町)を経て湊沼川を渡り平戸<sup>ひらど</sup>(旧常澄村)を通り塩ヶ崎へ至る道であったことがわかる。塩ヶ崎からは北西に進路を変え、水戸方面へと伸びている。この「塩の道」を塩ヶ崎から実際に歩いて調べた梶田昌徳氏によれば、前浜、湊村(現那珂湊市)の荷は舟で湊沼川を上り平戸から陸路で塩ヶ崎へ向かうという。同地の折居神社の南側の坂道を上がり、大串<sup>おおくし</sup>の宿内、木戸前<sup>おおぬき</sup>、大場<sup>なかつば</sup>の中坪(旧常澄村)を経て、佐竹氏支配の頃の物見塚と言われている塚がある町附<sup>まちづき</sup>(水戸市酒門町)で「古代の官道、奥州街道と交差する」とし、町附から更に西へ進み、笠原<sup>かさはら</sup>、千波<sup>せんば</sup>、河和田町<sup>かわわだ</sup>(水戸市)へ至る。河和田町周辺には古い伝承が多く、榎本地区には昔、市が開かれ、塩沢という塩の豪商が屋敷を構えていたことや、親鸞上人の弟子唯円が同地に道場を開いたのも塩街道により栄えた現れであろうと言われている。河和田町からは北西方向に進み、飯島町(水戸市)の鹿島神社前で二路に分かれる。一方は西へ伸び、筑地(内原町)、和尚塚(友部町)、佐伯山<sup>さしほ</sup>の南側を廻り大郷戸<sup>おおごうと</sup>(笠間市)を経て、岩瀬町、協和町を過ぎ下野国国府へ至り、もう一方は北へ伸び、加倉井町<sup>かくらい</sup>、木葉下町<sup>あばつけ</sup>(水戸市)、古内(常北町)、塩子<sup>しおご</sup>(七会村)を経て茂木、日光方面へと至るとしている。現在は畑や宅地造成により原形をとどめていない所が多いが、さらに同氏は、「水戸市酒門町町付から古宿、笠原町、千波町、河和田町南区までは塩街道と呼ぶ。飯島町まではなまったのかショ街道。内原町和尚塚下の坂道が塩街道。常北町の内原や栃木県茂木町内に塩街道の名があると聞く。」と書いていることから、この街道が「塩の道」であることがわかる。県内には「塩」のつく地名をいくつかあげることができるが、塩子(七会村)という地名もこの「塩の道」と関係があるものと思われる。

このように各地に「塩街道」という名が残っていることや昔の市の伝承、そして海岸より那珂川沿いに下野方面へ至っていることから、馬あるいは人によってこの街道を利用して塩が運ばれ

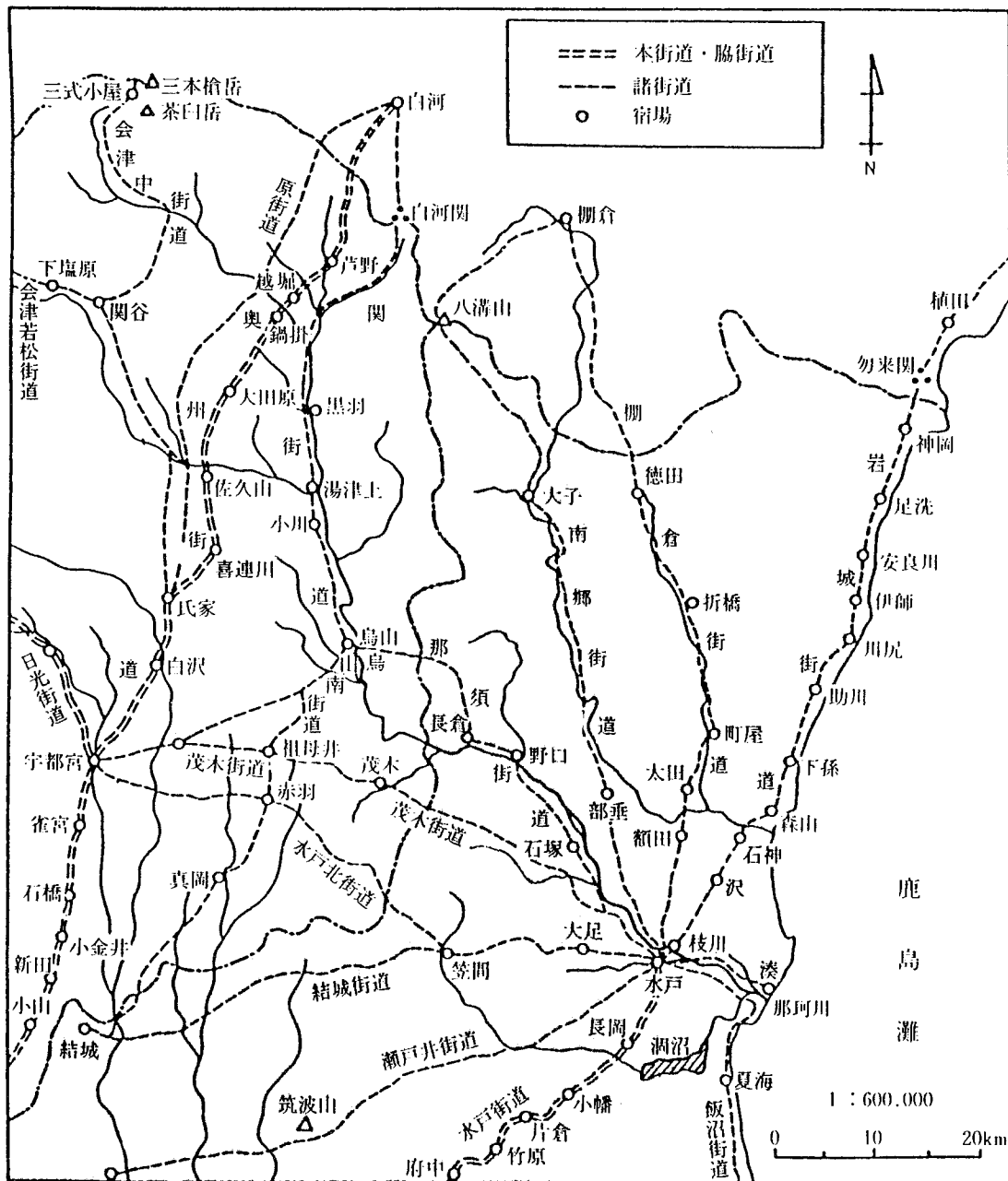
たものと考えられる。

水路については、近世になって那珂湊が奥州や北海道と江戸を結ぶ海上輸送の中継港<sup>(4)</sup>としての位置を占めるようになり、これに伴い、那珂川の舟運が発展し、河口の那珂湊や城下町として発展した水戸を中心<sup>(5)</sup>にたくさんの河岸<sup>(6)</sup>が設けられ<sup>(7)</sup>、上流部と下流部の物資の往来が盛んに行われるようになった。上流からは水戸城で使用する年貢米や薪炭、材木の他に雑穀類、煙草、楮皮、菜種油等が運ばれ、下流からは醤油、味噌、塩、魚介類等が運ばれたという記録が残っている。その中には「塩」も記載されてはいるが、資料によると近世の中頃の塩は、瀬戸内海沿岸で生産された赤穂（兵庫県）や齋田（徳島県）の塩が多数を占めていたと記載されている。従って在地産の塩が運ばれていたかどうかは不明である。

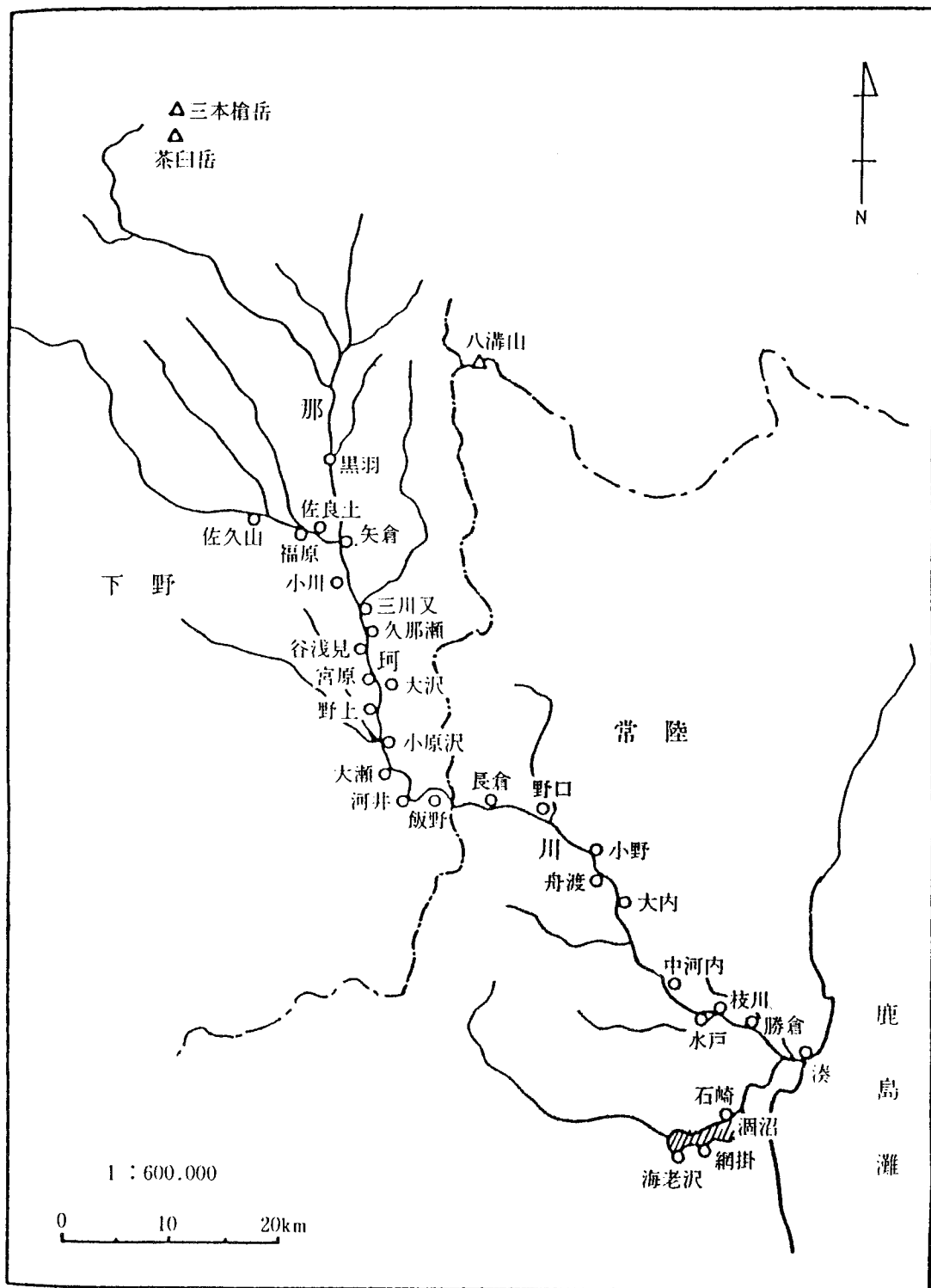
これらのことから、沢田周辺で生産された塩は、中世においては鹿島灘沿いで生産された塩同様に塩街道を通じて下野方面まで流通していたものと思われるが、近世になると海運や河川を利用した舟運が発達し、遠方からの物資や在地産の物資の大量輸送が可能となったことに伴い、赤穂や齋田産の塩におされ、自村及び近隣村への供給と自家消費用として流通していたものと思われる。

#### 注・参考文献

- (1) 宮崎報恩会版 「新編常陸国誌」 崙書房 1973年
- (2) 梶田昌徳 「水戸の塩街道」 『茨城の民俗 第10号』 茨城民俗学会 1971年
- (3) 河和田記念誌編集委員会 「かわわだ 水戸市市制100周年記念」 1990年
- (4) 茨城県 「茨城県史＝近世編」 1985年
- (5) 堀口友一 「那珂川流域の街道と舟運」 『常総の歴史 第4号』 崙書房 1989年
- (6) 御前山村郷土誌編纂委員会 「御前山村郷土誌」 1990年
- (7) 勝田市史編纂委員会 「勝田市史 民俗編」 1975年



第340図 江戸時代那珂川における河岸（堀口友一氏 作成 1989）



第341図 近世那珂川流域における街道（堀口友一氏 作成 1989）